

**広島県佐伯郡廿日市町  
阿品積石塚発掘調査概報**

1 9 7 5 . 3

**広島県教育委員会**

## 広島県佐伯郡廿日市町阿品積石塚発掘調査概報

### 目 次

1 位置と歴史環境	1
2 調査の経過	3
発掘調査日誌	3
3 検出の遺構	5
4 出土遺物	8
5 まとめ	8

### 図 版 目 次

図版 1	a 積石塚遠景
	b 積石塚近景
図版 2	a 積石塚全景（北西より）
	b 積石塚全景（南東より）
図版 3	a 積石近景
	b 墳丘断面

### 挿 図 目 次

第 1 図	阿品積石塚位置図（×万）	----- (1)
第 2 図	積石塚付近地形図	----- (5)
第 3 図	積石塚断面図	----- (6)
第 4 図	積石塚平面図	----- (7)
第 5 図	遺物実測図	----- (8)

「第 1 図に使用した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の 5 万分の 1 地形図を複製したものである。（承認番号 昭50中複、第 5 号」

### 例 言

本概報は、昭和49年に広島県教育委員会が実施した廿日市住宅団地造成事業地内に含まれる阿品積石塚の発掘調査概報である。本概報の作成、執筆ならびに編集は広島県教育委員会文化財保護室職員小部隆があたった。

なお、発掘調査にあたっては、廿日市町、廿日市町教育委員会の協力によるところが多い。記して謝意を表したい。

## 1 位置と歴史環境

阿品積石塚は、広島県佐伯郡廿日市町大字地御前字阿品に所在する。

廿日市町は広島から南西に約15km、名勝嚴島の対岸に位置し、広島のベッドタウンとして、近年急速に人口が増加しつつある。

廿日市町の歴史は、古く縄文時代に始まるが、文献に現われて以後は嚴島との関係をぬきにしては考えられない。すなわち古代において、嚴島は島全体が聖地とされ、社人といえども島内には居住できず対岸の廿日市町廿日市、宮内、地御前に住んでいた。平安末期になると嚴島神社は平氏の信仰を得て盛えたが、それとともに嚴島神社領の中心地としての廿日市も栄えていった。その後鎌倉時代に入ると周防の守護職である藤原氏が廿日市に桜尾城を築き、安芸の武田氏と抗していたが、室町時代には周防の大内氏が直接治めることになった。その間、安芸では毛利氏が勢力を拡大し、周防では陶氏の反乱によって勢力圏の境であるこのあたりの状勢も陥悪化し、天文23年（1554）の折敷畠合戦、弘治元年（1555）の嚴島合戦をみるとこととなる。これらの戦は、毛利氏の勝利により桜尾城を中心とするこのあたり一帯は毛利氏の支配下となった。

こうした政治的推移の中で、室町時代に入ると社人の在島化が進んでいき、廿日市は神領の中心



第1図 阿品積石塚位置図

(○印 1. 清盛塚 2. 宮の尾城跡)

(%万 嶋島)

地としての性格はうすれ、政治・経済・文化の地域交易圏の中心として発展していった。しかし、神地としての厳島は現在も残り、神地に禁忌をきらったことで島内の死人はすべてこの廿日市周辺に運び埋葬している。

阿品積石塚は角礫をつみあげて墳丘とした、いわゆる積石塚であるが、周辺のこの種の積石塚には廿日市町大字原字後畠のあん屋敷積石塚、宮島町宮島公園内の清盛塚等がある。

あん屋敷積石塚は水田中に孤立した積石塚で、直径11m、高さ2mを計る。全面がこぶし大の石からなり、頂部には墓石がたてられている。

清盛塚は、厳島神社西側の舌状台地先端に立地した積石塚で、平清盛が平家一門の繁栄を祈願して一字一石経を埋めたという伝承がある。全体は長径25m、短径4m、高1.5mの長円形をなしているが、石積みの状態および使用されている円礫からすると、これらは北側の径4mのもの中央の13m×4mのもの、南側の径4mのものの3基が連なっているものとも思われ、その構築はいずれも地山を削り出して墳丘の形態を整えたものと思われる。この周辺は昭和19年に開墾されたが、その際、陶製の甕、宋代の白磁盒子、梅花双雀文鏡、刀片などが出土したと伝えられている。

その他廿日市町大字地御前字野坂では灰釉で肩に印花文がある古瀬戸の瓶子が出土しており、骨壺と思われることから、こうした積石塚のほかにも骨壺を中心とした墳墓の形態もあるものと思われる。

## 2 調査の経過

阿品積石塚は古くから清淨の地「はみが頭」として知られていた。ところが昭和45年に広島県開発局はこの地域一帯を廿日市地区住宅団地造成事業用地として選定し、昭和46年2月には広島県教育委員会あて当該地内136万m<sup>2</sup>の埋蔵文化財の取り扱いについての照会をしてきた。

県教委ではこれをうけて同年11月に1週間にわたり当該地域の埋蔵文化財包蔵地分布調査を行なったが、地内には阿品積石塚の他には埋蔵文化財包蔵地は存在しないことから、その旨を開発局長あて回答し、あわせてその保存について要望した。

その後、県教委は開発局と保存の方向で再三協議したが、現地が住宅団地造成の安全とかんがい対策上必要な貯水池関係施設予定地になっているため保存は困難であると判断し、この結果49年5月には開発局長より文化庁長官あて発掘届が提出された。発掘調査は7月1日から13日までの11日間、県教育委員会文化財保護室の小部隆、古瀬裕子、木村妙子があたった。

発掘調査は墳丘積石の調査に主眼をおいたが、積石塚が丘陵先端部に立地するため自然地形との関係もあることから、墳丘から東西南北の4方へ長さ10mのトレンチを設定した。ところが、地表下はすぐに地山となっていたことからみてなだらかな丘陵先端部を末端部だけ削って構築しており、自然地形を上手に利用した遺跡であることが判明した。墳丘は当初円形をなしていたが清掃の結果方形と考えられたため墳丘頂部を中心十字に四分し、その中軸線にそって断面図をとりつつ掘り下げた。しかし石積みは薄く、しかも内部にはほとんど遺物を含んでいなかった。また石積みの下はすぐに岩盤となっており何ら遺構は検出できなかった。

### 発掘調査日誌

1974年（昭和49）

7月1日（月）曇時々雨

午前10時より関係者出席のもとに慰靈祭を行ない、午後より、草刈り、テントの設営等の発掘準備と遠景、近景の写真撮影を行なう。

7月2日（火）曇時々雨

墳丘ならびに周辺の地形測量（100分の1）を行なう。積石塚は尾根先端を利用して構築したもので、前面を切りとて大きく見せている。墳丘積石の清掃を開始する。

7月3日（水）雨のち曇

墳丘積石の清掃を続ける。

墳丘周囲を調べるため四方に長10m、幅1mのトレンチを入れるが、表土下は10~20cmですぐに地山となっている。

7月4日（木）曇時々晴

墳丘積石の清掃を続ける。墳丘周囲の4本のトレンチの清掃、写真撮影ならびに実測を行なう。

7月5日（金）曇

墳丘積石の清掃を完了する。積石は必ずしも墳丘の平面とは一致しておらず、一辺約7mの方形になるらしい。

7月6日（月）晴

墳丘積石の写真撮影を行ない、実測を開始する。

7月8日（火）晴

墳丘積石の実測を続ける。断面図作成のため墳丘水糸にそって南北に幅1mのトレンチをあける。積石はコアシ大の花崗岩角礫が用いられており、堆積は薄く厚いところでも50cmにみたない。

7月10日（水）曇

墳丘積石の実測を続ける。南北トレンチ断面の写真撮影、実測を行なう。東西にも同様のトレンチをあけ断面の写真撮影、実測を完了する。

7月11日（木）雨のち曇

墳丘積石の実測を完了する。積石の除去を開始する。

7月12日（金）晴

積石の除去を行なう。積石の状態は上部も下部も変化はみられず、下部はそのまま地山である花崗岩盤に接している。なお、遺物は上部に土師質土器片、陶磁器片が2・3点みられたにすぎない。

7月13日（土）雨

積石をすべて除去し写真撮影を行なって、阿品積石塚の発掘調査を終了する。

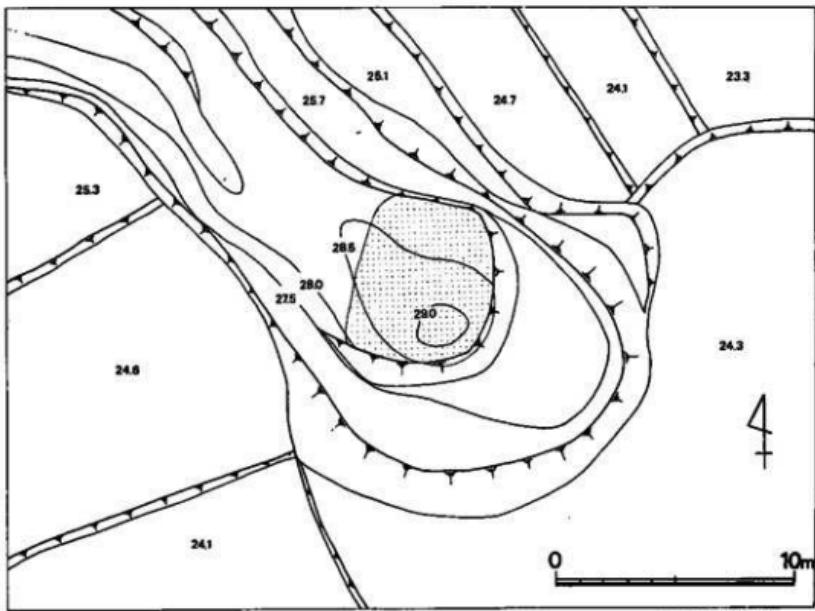
### 3 検出の遺構

阿品積石塚は阿品の谷の最奥部、海岸より約1kmはいった舌状台地先端の標高29m、水田面からの比高約5mの位置に立地している。周囲は山林でおおわれており、遠望はきかず、わずかに南東側が水田として開けているにすぎない。

調査前は径約10m前後の円形の墳丘をもつたものと思われたが、調査の結果自然地形に少し手を加え少量の角礫を積んだだけの小規模な積石塚であることを確認した。

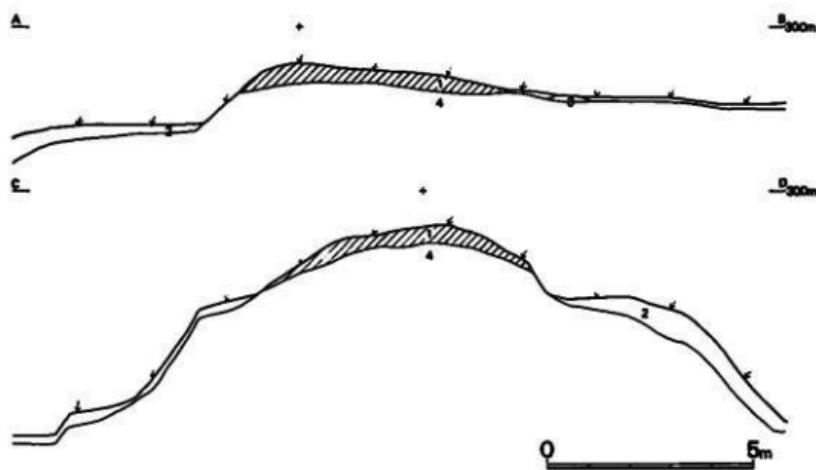
積石塚は、この舌状台地先端を二段にわたって削平調整して構築したもので、墳丘の前面には幅5mの平坦面がある。従って外観は二段築成の大墳丘の觀を呈するが、これは一段目が水田面から崖状に3.5mも切りたっていること、さらに間隔をあけて径8m、高さ1.5mの墳丘を構築していることからして意図的に行なわれたものらしい。

墳丘は当初径約8m、高さ1mの円形に地山を削り出して整形し、その上に石積みを行なったもので、この範囲は墳丘よりやや小さくなっている。これは墳丘が円形であるのに対し、葺石は南北を軸とした方形に行なわれているためで、全体としては南北7.5m、東西6.5mを計るが、2段以上に積まれているのは南東部（中央部）の5m四方であり、これをもって墓域の中心とする



第2図 積石塚付近地形図

(アミ目は積石)

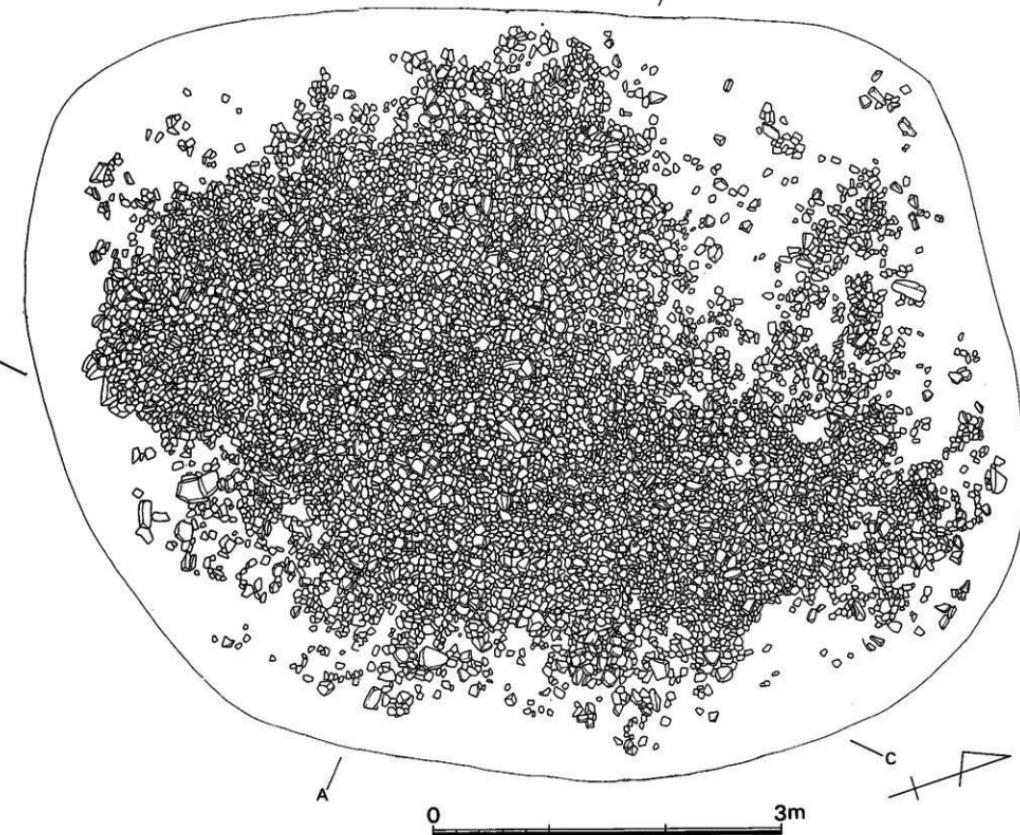


第3図 横石塚断面図

ことができよう。葺石は同じ幅でさらに北西へ2m延びるが、この部分はなだらかな斜面で、転石の可能性は少ないとから当初から表面だけに葺いたものと思われる。なおこれらに使用されている石はすべて5cm内外の花崗岩角礫で、円礫はみあたらず、地盤と同じ性格をもっていることから、周囲の岩盤を碎いて使用したものと思われる。

積石下はすぐに地盤となるが、地盤は花崗岩盤であるために手を加えることができなかったのか、何らの遺構をも検出することはできなかった。

以上のように本積石塚は地盤を削り出すことによって整形し、それに若干の石積みを行なっただけの単純なもので、遺物も積石中に後世の混入と思われる若干の土師質土器、磁器、スラグが含まれていたにすぎず、墳墓として断定する決定的なものは検出できなかった。



第4図 積・石塚 平面図

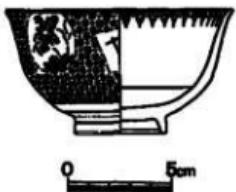
## 4 出 土 遺 物

出土遺物には、土師質土器、磁器、スラグがあるが、すべて積石中から発見されたもので、後世混入した可能性が強い。

**土師質土器** 土師質土器は小量でしかも破片が小さくその原形を推定することは困難であるが、口縁の内わんした土鍋の口縁と、碗と思われる底部破片がある。

**磁器** 磁器には、伊万里焼、小谷焼の破片がおのの少しある。伊万里焼は小片で、白地にあざやかな緑色で絵付をしたものと、それに赤色顔料を加えたものの二種があり江戸末期以後のものと考えられる。小谷焼（第5図）は、明治期に製作されたもので、径11cm、高さ6.9cmの、口縁が外わんし、胴部のふくらんだ高台付の湯呑である。全面に乳白色の霜をかけ、その上に緑色で印をおしたもので、外面には扇形と円形とを交互に描き、その間を方形と点列で格子状にうめている。また内面は口唇部を塗り、それから下へ「」の文様を連ねている。なお底部には鉄足がみられる。

**スラグ** こぶし大のものが6片出土した。



第5図 遺物実測図

## 5 ま と め

阿品積石塚は谷頭の舌状台地先端に立地した径8m、高さ1.5mの円形の積石塚である。墳丘は、地山も整形したのち墳頂部に一辺5mの方形に石積みを行ない、さらに北西へ2m延張して石を葺いたもので、積石の他には何ら遺構を検出することはできず、出土遺物も時代の明らかなものでは後世の混入と思われる江戸末から明治期にかけてのもののみであった。従って何時、何の目的で作られたものは明らかにできなかったが、形態的には明らかに積石塚であり、地元では古くから清淨の地「はみが頭」として畏敬され、さらに中世における巣島との関係、また中世末期の折敷畠、巣島の両古戰場にも近距離にあることなどからして、中世を中心とした時期の墳墓であろうことは容易に想像することができよう。

広島県においてこの種の積石塚は比較的多く知られているが、調査されたものは非常に少なく、性格的にも中世の土臺層を中心とする墳墓であろうというほか、具体的にはほとんど明らかにされていない。また一般的に積石塚といつても、立地、規模、形態、内部主体、墓標・信仰の有無文献とのつながり、地域的特質、歴史的背景などに種々の差がありその具体的な内容については、資料の蓄積を待つて総合的なながめなければならず、その意味において阿品積石塚のもつ意義は大きいといえよう。

図版 1



a 積石塚遠景



b 積石塚近景（北西より）



a 積石塚全景（北西より）



b 積石塚全景（南東より）

図版 3



a 積石近景



b 墳丘断面

1975年（昭和50）3月

広島県佐伯郡廿日市町

阿品積石塚発掘調査概報

編集・発行 広島県教育委員会  
印 刷 日進印刷株式会社